特集〈背〉

集団主義と自己責任

波多野　純

ネパールでの文化財保存活動

一九七八年以来、仏教建築の源流を求めてネパールに通い続けている。お釈迦様が生まれた国ネパール。インドでは石窟寺院にしか見られなくなってしまった古い形式の寺院が、今も地上に存在する。ビハーラと呼ばれる仏教僧院は、かつては独身僧が住み修行生活を送る場であった。その後、僧職カーストの住居あるいは信者を集める会堂へと変化する。

一九九〇年から六年かかって、古都パタンの町にある仏教僧院イ・バハ・バヒを修復した。十五

世紀の創建で、現在の建物は、十七世紀初頭まで溯る。歴史的に重要な建物であるばかりでなく、町のランドマークとなっている。朝靄のなかを灯明をもったお参りの人が訪れ、午前中は小学校、主婦の洗濯場、午後は中学校、夕方には男たちの博打の場と、地元の生活にとけ込んでいる。

修復工事は、私たち日本工業大学ネパール調査団のメンバーが、ひとりで現地に滞在し、地元の職人さんたちと一緒に仕事を進めた。私たちに出来ることは限られていても、現地の文化財担当者や職人さんに文化財修理の考え方や技術が根付けば、将来大きな力となりうる。そんな想いから、自転車で現場に通い、耕運機に便乗して材木を買い付けた。

便利さを越えた自立

滞在中、識字教育の母親学級を開いているNGOの女性に話を伺う機会があった。ネパールでは、首都カトマンズ周辺を除くと、小学校への就学率がきわめて低い。それを解決するには、まず子どもたちの母親に、学校へ通うことの重要性を理解してもらわなければならない。そこで、母親教育から始めた。ところが、ネパールの男性はまだまだ保守的で、妻が夜間外出することを極端に嫌う。それを一軒一軒説得して歩いているという。

別れ際、「明日からは連絡つかないよ」と言われた。「プロジェクトの村は、カトマンズから飛

▲ネパールの仏教僧院修復現場で生まれた職人さんの子どもたち

行機で一時間、それから一昼夜歩いてたどり着く山奥の村で、電気もないし、電話もない、連絡のしようはないよ」。「それはたいへんですね」、私の間の抜けた言葉に、「そんなことないよ、毎朝起きる頃、家の前に山羊の乳が届くよ」。そう言って立ち去る彼女の「背」は、とても颯爽としていた。

それに比べると、男性はだらしない。「こんな国に飛ばされちゃって、俺の将来見えちゃったな」と、日本に帰国したら偉くなれるかどうかばかり気にしている。この国にどっぷり浸れない人が多い。男が、国、役所や会社、さらに家族、「背」にいろんなものを背負っているのは、分からないわけではない。でも、「ネパールは汚い」と言いながら、現場で唾を吐かれると、「やなら帰れ」と怒鳴りたくなる。

ネパールのように、西欧的価値観と遠い国にいると、この国の人や文化が好きな人と、仕方なく派遣された人では、日々の感じ方が大きく異なる。好きな人にとっては、不便な国でもなければ、汚い国でもない。

ボランティア活動があたかも美談のように語られる時がある。冗談じゃない。そこにいるのが楽しかったり、居心地がよかったりするだけだ。犠牲的精神なんかじゃない。「自分が必要とされている」実感だけで十分だ。

本当の自己責任

先日、イラクで拉致された高遠菜穂子さんが、解放された最初のインタビューで、「私、イラクの人たちを嫌いになれないんです」と、ふたたび

イラクに戻る可能性があることを示唆した。「あ、彼女は本物だ」と、これを聞いた瞬間に思った。ところが、首相をはじめ国内の反応は、まったく違っていた。自己責任論。「渡航禁止を無視して出かけた奴が悪い、それをわざわざ助けてやったのに」ということらしい。こんなレベルには「池で溺れている子どもを見ても、立ち入り禁止の札があったら、飛びこまないのが正しい対応ですね」と、答えれば十分だろう。普通の感覚の持ち主だったら飛びこむ、と思っていた自分が特殊なのだろうか。

もっと本当の自己責任を考えたらいいと思う。捕虜虐待が公になり、責任論がくすぶっている。組織的虐待か、一部訓練不足の兵士の暴走か。もし、組織的行為であったら、上官の命令であったら、直接手を下した兵士は免責されるのであろうか。日本的社会は免責したがる。「上官の命令を忠実に守った兵士は、職務に忠実であり、責任はない」。冗談じゃない。不当な命令に対しては、やってはならない行為を強要されたら、拒否する責任がある。それが自己責任である。この考え方は、集団主義の対極にあるから、多数派にはなれないし、社会的制裁も受ける。それでも、心を汚し、自らを否定するよりはましである。

ここまで書いたときに、橋田信介さんらの殺害が報道された。「だから行くなと言ったじゃないか」とのニュースも流れたが、自己責任論は前回ほど激しくない。彼の仕事にかける覚悟や現地の人々に対する優しさを、多くの人が理解できた。橋田夫人の、心のつらさを隠した凛とした対応が、共感を呼んだ。そこには、良質な自己責任のあるべき姿が示されていた。

制服止めませんか

集団主義と自己責任の考え方は、行動規範として対極にある。根底に集団主義がある社会が自己

責任をもちだしたところに、今回の議論の不毛がある。

集団主義の典型として、制服がある。あなたの幼稚園で保育園で、制服を止めてみませんか。制服を止めて困る理由を考えてみてください。園児とそれ以外の区別がつかない。その園に所属する誇りがもてず、統制がとれない。どんな理由も、集団主義に根ざしていることに気付く。

突出した行動を嫌う集団主義から、「背」でも自己主張できる、自己責任の社会へ脱皮しませんか。

（日本工業大学）

背中で、背中から、感じること

槙谷　厚子

まるで背中にも目があるみたい……尊敬する保育者である堀合文子先生の保育を見せていただいたときに、多くの参加者からため息とともに聞こえてくる言葉である。私たち保育者は、一人ひと